

逸品探訪

太宰府の絵師に関連する
逸品・名品を紹介します

吉嗣梅仙・拝山作
なかしまけじゅうたくふすまえ

【中島家住宅襖絵】

江戸時代から続く旧家の襖絵



(上) 梅仙《瓶花図》紙本着色 各面 174.5 × 67.8cm
(下) 拝山《山水図》絹本着色 各面 33.5 × 44.0cm
明治19年(1886) 福岡県添田町管理



※住宅公開日時の詳細
については添田町役場まちづ
くり課(0947-821236)までお問い合わせください。

父子合作の襖絵

この住宅の仏間に設えられている4面続きの襖に梅仙の絵が、仏間隣の座敷にある違い棚の地袋(床部分の収納スペース)に拝山の絵が描かれています。梅仙の襖絵は、中国風の花瓶や花籠に、南天、梅、仏手柑、牡丹、蘭、石榴、葡萄、菊等々、四季折々の縁起の良い花や果実を、襖4面をひとつのかんばりとして瀟洒な雰囲気とともに描いています。一方の拝山の小襖は、やわらかく丁寧な筆づかいによる山水図が描かれており、各面に自賛が記されています。贊のひとつには耶馬渓を詠んだ詩があり、当地をイメージして描かれたものかもしません。

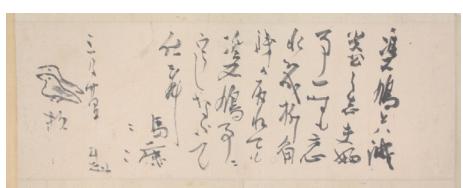
豊前地方の足跡

本図が描かれた明治19年は、梅仙70才、拝山41才の年です。中島家住宅はこの2年前の明治17年に大規模な改修を行っていたよう

で、襖絵の制作はこの改修を機に依頼されたものかも知れません。絵師として、文人として不動の地位を築いていた梅仙・拝山父子によるこれらの方作は、中島家との浅からぬゆかりが想像され、当地に二人の名声が届いていたことを語っています。

建物と同様この襖絵もかなり傷んでいたそうですが、このたびの保存事業の際に修理され、美しい姿を取り戻しています。(井形栄子)

「双鳩」とは文字通り二羽の鳩を表し、画題として多くの絵師が作品をのこしています。

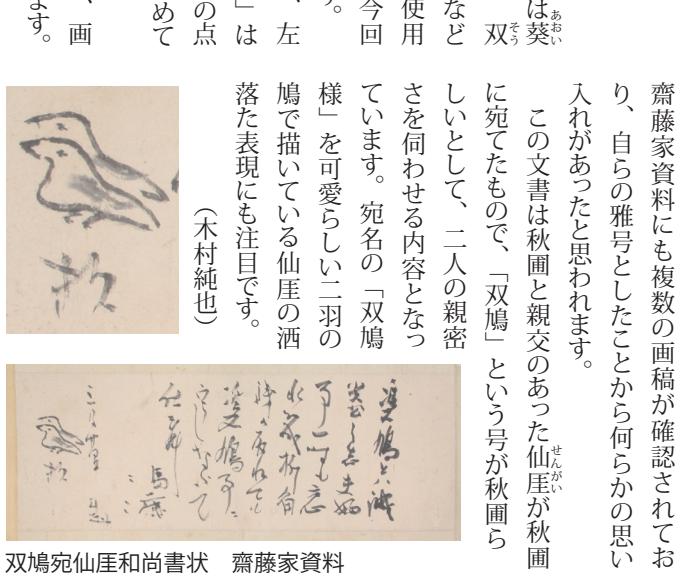
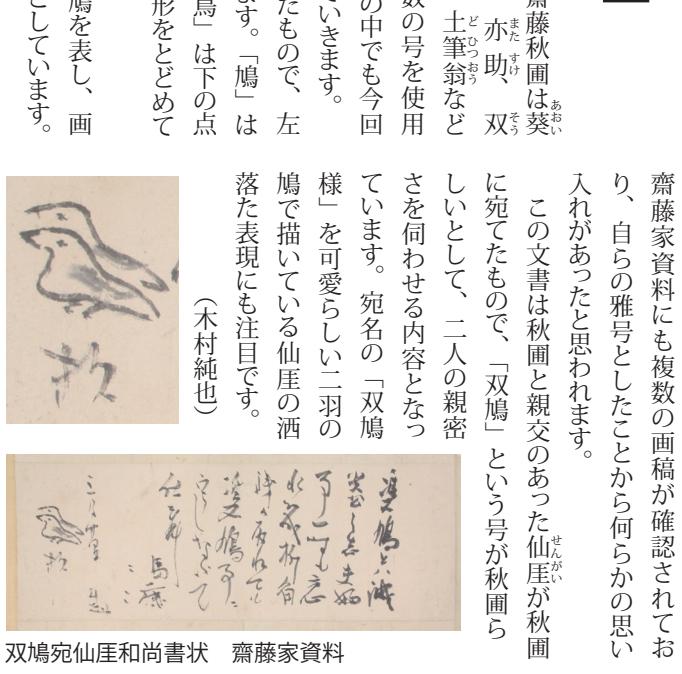
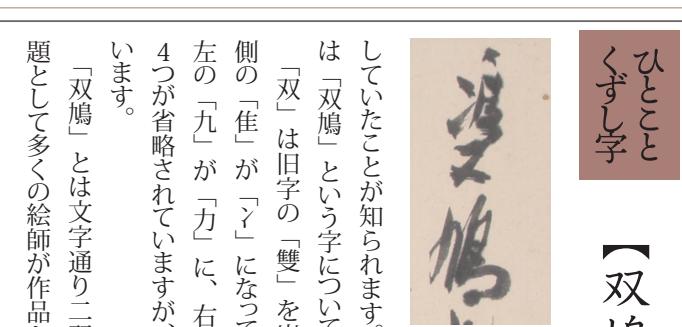


双鳩宛仙厓和尚書状 齋藤家資料

いちまい
画稿鑑賞

【山鳥図】

やまとりず
齋藤家資料



双鳩宛仙厓和尚書状 齋藤家資料

キジ目キジ科に属する山鳥は、深い山の中に住むことからその名があります。体の大きさは雉子とほぼ同じですが、オスの山鳥は雉子より尾羽が2倍近く長く、胴体は雉子のようなく深緑色ではなく、まだらな茶色をしていますので、これは山鳥のオスだと判断されます。

縦47センチ、横約1メートルの画面には、ほぼ実物大の山鳥が写実的に描かれ、部分的に淡い彩色が施されています。余白

をしていましたので、これは山鳥のオスだと判断されます。

実際にどんな色をしていたのか

ではなく、どのように彩色するかの注意書きがある点は、画稿ならではだと言えるでしょう。(井形栄子)

实物を正確に写しつつ、実際にどんな色をしていたのかではなく、どのように彩色するかの注意書きがある点は、画稿ならではだと言えるでしょう。(井形栄子)



紙本着色 47.0 × 108.8cm

には頭部や尾羽の部分スケッチもあり、胴体の上方あたりには本物の羽毛が貼り付けられています。さらに画面には

「シャ曲」「朱工ン曲」などの書き込みもあります。「シャ」は代赭色(赤茶色)、「エ」は臘脂色(えんじいろ)のこと、「曲」はくま取り、すなわち量かしや濃淡をつけるという意味です。

実物を正確に写しつつ、実際にどんな色をしていたのかではなく、どのように彩色するかの注意書きがある点は、画稿ならではだと言えるでしょう。(井形栄子)